

「みやびのもり」で、ターミナルを迎え（満100歳 7月逝去）見送られた運営推進会議元ご家族代表者にご参加いただき、体験者としてのご家族の思いをお聞きしたくお招きしました。

元ご家族

ほぼ最期まで寝込むことなく母をホームで見送りました。

実は、当初は母を入所させることは子供としてとても嫌でした。「老人施設」の知識は何もなかったし、また兄弟や親戚身内の中には、施設というものに偏見もあって、家で介護しないことの負い目で拒否感が強かったです。

しかし、とても家で介護できない、手に負えないと判断して入居させました。

入って数年で次第に子供の見分けがつかなくなっていきましたが、秋祭りや家族会などを通し、また、面会時にはスタッフからの話を聞いたり、いろんな所に連れて行ってもらっている様子や家事をしている母を見て「こんなことしてくれんやな」とわかってきて、施設では、よくしていただいたと心から思っております。最期は、みんなで看取ることができました。

参加者

私も同様に入所させて見送った経験があります。

子供として施設に入れることは複雑な思いがあるので、よく解ります。

「会いに行く」ことも「介護」だと自分に言い聞かせ、介護相談される方にも、そのように伝えさせていただいています。

施設

経験から感じたことは、普段、直接介護をしていない家族ほど、例えば、嫁いで遠く離れて暮らしている娘さんとかですが、普段に介護に参加していないからこそ、施設入所に対する納得度の低い傾向にあります。

そして職業人として言えるのは、我々は、入居される方に出会った時には、既に老いており、病気だったりしているわけで、ご家族のようにお元気だった頃の記憶がありません。その記憶の無い者（職業としている者）と、活躍していた頃の父や母の記憶をもった家族とはまるで受け止め方も思いも違い、家族ゆえの疲労感や子供だからこそ腹が立ったりするのは当然だと思います。

家族代表

うちは、自分から意思を伝えることが出来ないので、母の気持ちを（察して）いただける介護を希望しています。

～施設として～

今回のお話を伺って改めて感じたのは、ご家族との面会や電話連絡をする機会などを通して、日常の取組みの報告の大切さや、ご家族の思いをすくい上げる機会とできるように、また、ターミナル期では、その時時のご本人の状態に合わせたケアをベースにして、ご家族の思いや要望を理解し合えるように、日々の対話の積み重ねが大切であることを思いました。